「てくる」に関する一考察

——変化事象に対する話者の捉え方に注目し——

呉佩珣（筑波大学大学院生）

要　旨

本稿は、「てくる」文で表現する変化事象を、時間の進展性を表す副詞との共起状況から「時間の幅を持つ変化事象」と「瞬間的事象」の２タイプに分け、さらに、話者との関わりという点から「てくる」の意味特徴を考察したものである。その結果、「時間の幅を持つ変化事象」は変化が終了するまでのいずれの時点においても「てくる」を用いて描写することができる一方、「瞬間的事象」は変化の瞬間にしか「てくる」で語ることができないことが観察された。それは、「てくる」は単なるアスペクトの機能だけではなく、話者は事象への気づきという意味特徴を持つためである。

キーワード:てくる、始動アスペクト、変化事象、話者との関わり、事態描写

1. はじめに

本稿は、変化事象を捉える際に用いられる「てくる」はどのような意味特徴を果たすのかについて考察を行うものである。「てくる」をアスペクトとして議論した研究の中では、前項動詞との統語的・意味的関係に焦点を当てたものと、「てくる」が用いられた文の動詞述語の分類に注目せずに、その文が表現した事象に着目したものに大別できる。これらの先行研究においては、「てくる」は事象の「発生」や「変化」を捉えるという意味用法を果たすと考察されている。しかし、以下の（1a）（1b）のように、１つのサボテンに対して捉える場合、異なる時点であっても同じ表現「枯れてきた」が使用される。「サボテンが枯れる」という変化事象は１つの事象であり、決して１つの事象には２つ以上の開始があるわけではない。それは「てくる」は単なるアスペクトの機能のみならず、話者との関わりのある表現のためであると考えられる。

（1）a.（多肉植物のサボテンが前より痩せているのを見たとき）枯れてきた。

　　b.（肉がほんの少し残りほぼからからになったサボテンを見たとき）枯れてきた。

（作例）

そこで本稿では、変化事象を描写する「てくる」文を対象とし、話者との関わりという観点から、変化事象およびそれと共起する「てくる」の意味特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究および本稿の立場

2. 1. 変化事象における「てくる」に関する先行研究

従来、「てくる」に関する多くの研究ではアスペクトとして「てくる」の意味用法を議論されてきた。すなわち、時間の経過に焦点を当てて状況変化を描くときの叙述（辻 2002）に使用される表現形式として論じられている。「てくる」をアスペクトとして議論している研究においては、前項動詞との統語的・意味的関係に焦点を当てたものは森田（1968）、今仁（1990）、益岡（1992）などが挙げられる。その一方で、「てくる」が用いられた文の動詞述語の分類に注目せずに、その文が表現した事象に着目したものは坂原（1995）がある。

坂原（1995:128）では「てくる」のアスペクト用法は始動アスペクトと継続アスペクトの 2 種類があると示唆している。どちらのアスペクトになるかは前項動詞のタイプによって決まり、前項動詞が有限界動詞（telic verb）かつ一方向への程度の強弱の変化を表す変化動詞であれば、変化の出現を表す始動アスペクトになり、程度の強弱がない同質的、無変化の継続なら継続アスペクトになるとしている。前者については（2）（3）を挙げている。「生き返る」と「枯れる」が表現する事象は両者とも必然的終結点があるものであるが、（4）に示すように、時間の展開性を表す副詞「だんだん」との許容が異なることから、両者とも有限界動詞でありながら、時間の展開性という点には相違があると考えられる。それから、（3）に関しては「てくる」によって変化の開始を表すと坂原は主張しているが、「枯れる」という変化事象には明確な開始点が把握しにくく、（3b）（3c）に示すように複数の時点でも「枯れてきた」が言えるように「枯れてくる」が表現する変化の開始は時間軸上でのどの時点を指すのかは考えられにくい。

（2）太郎が、生き返ってきた。

（3）a. サボテンが枯れてきた。

b.（多肉植物のサボテンが前より痩せているのを見たとき）枯れてきた。

c.（肉がほんの少し残りほぼからからになったサボテンを見たとき）枯れてきた。

（4）a. *だんだん生き返った。

b. だんだん枯れた。

（（2）（3a）は坂原 1995:129、（3b）（3c）は（1）を再掲、（4）は作例））

さらに、(5) (6) の「風が吹く」「雨が降る」を Kenny (1963) による「非完了の逆接 (imperfective paradox)」で検証してみると、「風が吹いている」「雨が降っている」は結果存続ではなく進行を表すため、どちらも無限界動詞（atelic verb）である。従って、「てくる」文における変化事象は必ずしも「有限界動詞」によって表されるとは限らないことが分かる。

（5）気のせいか生ぬるい風が吹いてきた。

（6）タイヤを交換しようと、身支度をしている間に雨が降ってきた。

（『BCCWJ』）

以上のように、「てくる」が表現しようとする変化事象は、時間の展開性を持つ副詞と許容できるか否かという 2 タイプが存在することと、その変化事象は必ずしも有限界動詞によって表されるとは限らないことが指摘できる。そこで本稿では、時間の幅を持つか否かという点から変化事象を分け、さらに「てくる」が用いられた変化事象の文では「てくる」はどのような意味特徴を果たすかについて考察を行う。

2.2. 本稿のアプローチ

本稿ではまず、変化事象は開始点と終了点が一致する瞬間的事象 (1) および時間の幅を持ちうるものという 2 タイプに分ける。変化事象に時間の幅を持つか持たないかに関しては、時間の中における事態の進展を表す副詞をテストフレームとして持ち込む。仁田（2002）では、時間の中における事態の進展を表す副詞は、進展様態型と進展時間型があるとしている。進展様態型はさらに「だんだん（と）、次第に、徐々に」といった変化の進展性を表すものと「いよいよ、どんどん、少しずつ」などのような変化の程度性拡大に関わるものがあるという。本稿で対象とするのは、時間の幅を持つか否かであり、事象内の変化は拡大するかどうかは直接関係ないと思われる。

一方、進展時間型とは「年々、日々、日毎に」といった「漸次的進展性を持つ事態が展開していく、その時間的あり方を差し出したもの（244）」であり、事態の繰り返しにも使われる。本稿で対象とする

変化事象は一つの事象であるため、事態の繰り返しにも使われる点からすると、表現する事象は一つのみならず、複数の瞬間的事象の繰り返しにもなりうる。従って、テストフレームとしては適さないと判断される。

以上のように、本稿は変化の進展性を表す副詞「だんだん（と）、次第に、徐々に」をテストフレームとして、変化事象の開始点から終了点まで時間の幅を持つか持たないかを判断する。

3.「てくる」が用いられる変化事象

3.1. 変化事象の 2 つのタイプ

本節では、変化の進展性を表す副詞「だんだん（と）、次第に、徐々に」を用い、変化事象文との共起状況から、変化事象に時間の幅を持つか否かを検証する。以下（7）は「てくる」が使用された変化事象を描く文である。それぞれの変化事象に変化の進展性の副詞を加えると（8）になる。

(7) a. サボテンが枯れてきた。
b. その理由が分かってきた。
c. 太郎が、生き返ってきた。
d. 何人かの仲間と歩いているところに、急に雨が降ってきた。

(8) a. サボテンが｛だんだん/次第に/徐々に｝枯れた。
b. その理由が｛だんだん/次第に/徐々に｝分かった。
c. 太郎が｛*だんだん/*次第に/*徐々に｝生き返った。
d. 何人かの仲間と歩いているところに、｛*だんだん/*次第に/*徐々に｝雨が降った。

（(7a)（7c）は（3a）（2）を再掲、(7b、c）は『BCCWJ』）

（7）（8）から、変化事象には変化の進展性の副詞と許容できるもの（8a）（8b）とできないもの（8c）（8d）があることが分かる。許容できるものは変化が時間の幅を持って進展する一方、許容できないものは変化に進展性を持たず、明確な開始の境界線があるのである。それぞれ概念図にすると以下の図 1 と図 2 になる。

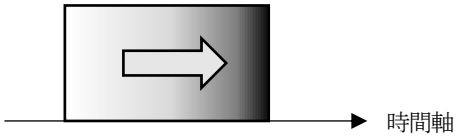

図 1　時間の幅を持つ変化事象

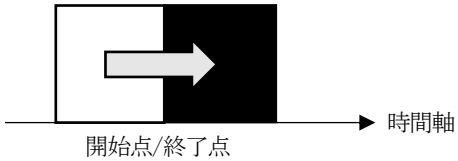

図 2　瞬間的事象

（8a）（8b）の「サボテンが枯れる」「その理由が分かる」のような変化事象は、時間に従って事象に内在する変化の度合いが漸次的に進展していく。このタイプの変化事象は持続性を持つものである。一方、(8c、d）の「太郎が生き返る」「雨が降る」といった変化事象は、時間における持続性・進展性を持たず、ない状態からある状態へ瞬間に変化するものである。

3.2. 変化事象における「てくる」の概念図

本節では前節で論じた両タイプの変化事象は「てくる」を用いて捉える際に、どのような意味特徴を果たすかについて考察する。坂原（1995）では始動アスペクトとしての「てくる」の概念を以下の図 3 に示している。

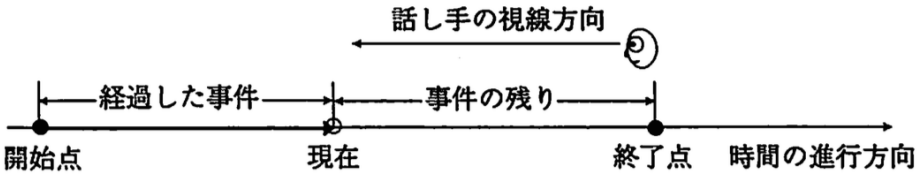

図 3　始動アスペクト「てくる」の概念図（坂原 1995：131）

始動アスペクト「てくる」は変化の開始を表し、「事件の捉え方は、観察者は完結点に身を置き、時間軸上を自分の方に進んでくる変化を記述するというタイプの概念化になる」と言及している。しかし、前節で述べたように瞬間的事象の場合は「開始点＝終了点」で、その間には時間の幅が存在しないため、話者が視線をどこに向かって変化を捉えるかは図 3 の説明は十分とは言えない。また、変化事象を表す動詞は必ずしも有限界動詞のため、現在と終了点の間には「事件の残り」だけではなく、「事象の継続」にもなりうる。以上に指摘した点を修正し、「てくる」を用いた両タイプの変化事象の概念図を図 4 と図 5 に示すように試みる。

図 4 では、終了点までのグラデーションの部分は変化が進展する事象であり、終了点に変化が終わり、その後に続く黒い四角形は変化事象の残りを意味する。「☺」は変化事象を捉えようとする発話時を表す。(9) に示すように、(9a) (9b) は図 4 の「☺」が指すいずれかの時点で描写する文である。変化の進展の度合いが異なっても「てくる」が用いられる。「てくる」は変化の開始を表すとすると、「サボテンが枯れる」という変化事象には 2 つ以上の開始点がある、あるいは話者によって変化の開始点は異なるということになるであろう。しかし、1 つの事象には 1 つの開始点しかないはずである。また、話者によって捉え方が異なるとはいえ、事象の開始は変わらないのである。従って、「てくる」はアスペクトが表す時間軸上における事象の完成度のみならず、話者との関与を示す機能も持つと考えられる。また、(9c) のように、変化終了後には「てくる」が用いられない。

図 4　時間の幅を持つ変化事象の「てくる」概念図

(9) a. （多肉植物のサボテンが前より痩せているのを見たとき）枯れてきた。
　　b. （肉がほんの少し残りほぼからからになったサボテンを見たとき）枯れてきた。
　　c. （サボテンが倒れ、生気を全く失ったのを見たとき）サボテンが枯れた/枯れている。
（(1) を再掲）

その一方で、図 5 では、白い四角形は変化する前の無の状態を表し、後ろに続く黒い部分は事象の残りまたは継続を意味する。境目のところは変化の瞬間となる。例としては (10) (11) が挙げられる。

図 5　瞬間的事象の「てくる」概念図

(10) 太郎が、生き返ってきた。

(11) 何人かの仲間と歩いているところに、急に雨が降ってきた。

((10) は (2) を再掲、(11) は『BCCWJ』)

図 4 のタイプは、複数の時点で同じ事象に対して「てくる」を用いて描写できるのに対し、図 5 のタイプは発話時が変化の瞬間でなければ、「てくる」を用いてその事象を捉えることはできない。その要因について次節で話者の捉え方という観点から考察していきたい。

4. 変化事象に対する話者の捉え方

前節で述べたように、時間の幅を持つ変化事象を描写する際に、異なる発話時点に語るとしても「てくる」が用いられる。一方、瞬間的事象の場合は、無から有へ変化する瞬間にしか「てくる」が語れない。つまり、下の図 4-1 と図 5-1 の「A」時点に事象を捉えると「てくる」が使用される。「B」時点に事象に対して捉える場合は、「ている」が選択される。

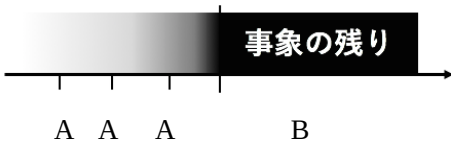

図 4-1　時間の幅を持つ場合

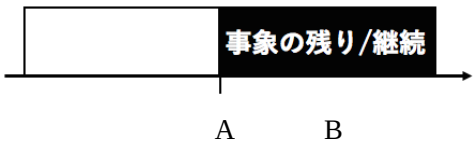

図 5-1　瞬間的事象の場合

図 4-1 の A に (12a) (13a) を、図 4-1 の B に (12b) (13b) を、図 5-1 の A に (14a) (15a) を、図 5-1 の B に (14b) (15b) を例として挙げられる。

(12) a. サボテンが枯れてきた。

b. 雑木の中の松の数本が枯れている。

(13) a. その理由が分かってきた。

b. 仕事ぶりはどうか、親に対する態度はどうかなど、すでに分かっているから決めやすいんです。

(14) a. 人間としてこの世に生まれてきた。

b. 春前には赤ちゃんが生まれている。

(15) a. 何人かの仲間と歩いているところに、急に雨が降ってきた。

b. スタジアムの外に出ると小雨が降っている。

((12) は (3) を再掲、(13) ～ (15) は『BCCWJ』、下線は筆者による)

(12a) (13a) のような変化しつつある事象に対して、変化が終了するまでのいずれの時点に話者が捉

えようとする場合は、「てくる」が用いられる。また、(14a)(15a)のような瞬間的事象には、その瞬間にその事象を描く場合は「てくる」が使用される。図 4-1 タイプでは、同じ事象に対して複数の時点「A」においても「てくる」を用いて把捉することができるということは、「てくる」は話者の捉え方に関与するためであると考えられる。つまり、変化事象が進展している中、話者がその変化に気づき捉える際に「てくる」で表現すると考えられる。時間軸上における事象の完成度を表すというアスペクトの機能の他に、話者の気づきも「てくる」によって明示されているのである。

5. まとめと今後の課題

本稿では「てくる」が表現しようとする変化事象には時間の進展性があるか否かという点で、「時間の幅を持つ変化事象」と「瞬間的変化事象」の 2 タイプに分け、前者は明確な開始点がなく、変化中のどの時点でも「てくる」を用いて描写することができるのに対して、後者は変化が瞬間に行われ、その瞬間を把捉する場合「てくる」が使用されるということを明らかにした。これは、「てくる」には話者の変化事象への気づきを表す意味特徴を持つためなのである。また、変化終了後の描写に対して、どちらの変化事象でも「てくる」ではなく「ている」が用いられる。

変化事象に対する捉え方に関しては、変化中ないし変化の瞬間に捉えようとするときに用いる表現と、変化が終わってその結果が目の前にあり、その状況を描写するときに使う表現が異なるということは、必ずしも全ての言語に見られる現象ではない。上田(2014)では、(16)(17)を挙げながら中国語では変化を直接知覚する場合も、それを直接知覚していない場合も文末助詞の「了(1e)」が用いられると示唆している。それは、目の前にある状況を見て、それより前の時間にあった具体的な出来事を想像して構築し、その変化事象を「了」で捉えるのである。つまり、この状況における話し手は、事態の外に身を置き、事態の推移を客観的に観察して初めて把握することができるという。

(16)(お湯が沸くのを待っていたところ、目の前でお湯が沸騰状態に達した)

噢, 水 开 了。

よし 水 沸く(変化)

(17)(給湯室の前を通ったら、だれが沸かしたかはわからないが、やかんの中のお湯が沸騰状態にある)

欸, 水 开 了。

あれ 水 沸く(変化)

(井上 2001:106)

日本語の場合は、(16)は「てくる」(「あっ、お湯が沸いてきた」)を、(17)は「ている」(「あっ、お湯が沸いている」)を用いて捉える。しかし、(16)の場合は「お湯が沸き始めた」も「お湯が沸き出した」も言える。「てくる」は変化事象への気づきを表す意味特徴を持つことを主張するために、「-始める」と「-出す」の 2 つの起動相との相違を明らかにする必要があると考えられる。また、変化事象に対する日本語話者の捉え方のメカニズムを解明するために、他言語との対照が必要とする。これらの課題を今後の課題としたい。

注

(1) ここでいう瞬間的事象は表された事象が瞬間に成立し、始まると同時に終わるため、開始の境界線が把握できるものである。金田一(1976)が主張している瞬間動詞とは同義ではないことを提示したい。

参考文献

井上優（2001）「現代日本語の「タ」―主文末の「タ」の意味について」『「た」の言語学』ひつじ書房、pp. 97−163.

上田裕（2014）「中国語の発見表現に関する研究」筑波大学博士論文.

金田一春彦（1976）「国語動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房、pp. 5−26.

坂原茂（1995）「複合動詞「V て来る」」『言語・情報・テクスト』2、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻、pp. 109−143.

辻幸夫（2002）『認知言語学キーワード事典』研究社.

仁田義雄（2002）『副詞的表現の諸相』くろしお出版.

益岡隆志（1992）「日本語の補助動詞構文－構文の意味の研究に向けて－」『文化言語学－その提言と建設』三省堂、pp. 546−532.

森田良行（1968）「「行く・来る」の用法」『國語学』75、國語学会、pp. 75−87.

Depraetere, Ilse. (1995) ”On the necessity of distinguishing between (un)boundedness and (a)telicity” *Linguistics and Philosophy* 18: 1-19.

Kenny, Anthony (1963) *Action, Emotion, and Will*. Humanities Press.

用例出典

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』中納言コーパス検索アプリケーション https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search、2017 年 1 月 31 日最終参照日.

（ウペイシュン、筑波大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程、s1630053@u.tsukuba.ac.jp）